

令和2年度 事業計画の実施状況

(1) 教育面

教育目標

- 1 学校改善の継承と推進
- 2 学習支援の強化（学習習慣の定着）
- 3 高校生徒募集の安定化
- 4 中学校の運営・推進と生徒募集の安定化

1 学校改善の継承と推進

各委員会の活動を活性化し、且つ校務運営委員会やカリキュラム等検討委員会などとの連携を強化し、教育計画を効率的に実施するとともに改善の推進に努めたい。

⇒ これまでICTの活用において、各分掌や教科において統一性が欠けていたことや教育効果の向上や情報活用能力の育成を図るため、それらについて検討する「ICT教育推進委員会」を設置した。

(1) 「学習活動と部活動の充実」

入学した生徒の学力や能力を向上させ、希望の進路を実現できる学校づくり、部活動を通じて心身の充実を図るとともに、その成果によって、地域に誇れるような学校づくりを推進する。

ア 学習活動

生徒の学習意欲を高め、それぞれの進路希望に応じて、必要な能力を向上させることにより、特に国公立大学や難関私立大学への合格者数の安定を目指す。

令和元年度（昨年度）において国公立大学の合格者は33名、令和2年度（今年度）は25名と減少した。令和3年度入試を担う新3年生における特進コースI類の生徒数が38名と少数であるが、生徒の意識や教員の指導力の向上が望まれる。

新2年生については、特進I類の生徒数が39名と少ないことから、教員間で個々の生徒の情報の共有化をさらに進め、HR担任や教科担当などの連携を強化し、よりきめ細かな指導を進め、再来年度の国公立大学への合格者数を安定させたい。

- ・例年、大学見学を1学年の6月に実施し、早期に進学の意欲を持たせることを目的としていたが、令和2年度はコロナ禍の影響で、実施できなかった。
- ・補習だけでなく、学力の定着状況の評価や学習目標に関する面接指導により入試の学力の向上を図る。

⇒ 年度当初から休校が続いたために、4月の面接週間が実施できず、生徒一人ひとりの進路希望の確認や学習状況の把握が遅れた。特に高校1年生については、入学当初の宿泊研修が実施できなかったため、高校の学習に関する初期指導の徹底がなされず、授業態度に落ち着きの欠けた生徒が見られた。

- ・体験学習への積極的な参加をさらに推進する。
 - ⇒ コロナ禍の影響ではあったが、警察、消防、自衛隊を招いて公務員講座、湘南医療大学を招き看護講座を実施した。ただし、公務員として就職できたのは自衛隊3名、看護関係に進学できたのは25名であった。
- ・進学コースについては、基礎学力の定着を主眼に、変更したウィークリースタディを総括し、更なる改善が必要かどうか検討する。また、看護学校志望者に対する補習を充実させるとともに、各種の資格の取得などへの一層の意欲を高める。
 - ⇒ 基礎学力の定着を主眼にベネッセの「マナトレ」を活用し、到達段階に応じてテキストの難易度を上げていくことができた。また、資格取得のための対策時間を設け、漢字検定やLiteras 論理言語力検定、ビジネスコミュニケーション検定など多様な資格で高い合格率を示した。補習体制は整いつつある一方で、希望する生徒数の減少が懸念材料となっている。
- ・ICT活用等により学習効果を高める。(継続)
 - ⇒ ICTの活用については、校内Wifi環境が整備され、各教科で様々な試みがなされている。また、休校中(4月～5月)の措置として、生徒へのリモート授業やグーグルの「Classroom」による朝のホームルームを全クラスで実施した。

○ 進路状況のまとめ(4月1日現在)

国公立大学	25名(昨年度33名)
	名古屋大(1)、東京学芸大(1)、筑波大(1)、静岡大(2)
	山梨大(2)、静岡県立大(9)、都留文科大(4)、群馬県立女子大(1)
	福島大(1)、北見工大(1)、徳島大(1)、神奈川県立保健福祉大(1)
私立大学	215名(昨年度223名)
	法政大(1)中央大(1)、常葉大(67)、龍谷大(3)、順天堂大(3)
	神奈川大(6)、東洋大(1)、神奈川工科大(2)、立命館大(3)
	など
短期大学	17名(昨年度17名)
専門学校	65名(昨年度71名)
就職	95名(昨年度94名)

イ 部 活 動

- (ア) 多くの生徒が部活動に所属し、有意義な放課後にする。
- ・4月に部活動加入WEEKを実施し、実際の活動を体験させることにより、入部後の混乱を防ぐ。
 - ⇒ 年度初めの休校措置のために、部活動加入WEEKは実施できなかったが、部活動加入率は69.6%と前年に比べて高かった。
 - ※ 令和元年度：68.0% 平成30年度：68.4%
 - ・生徒数減少に伴い、部活動の統廃合の検討を進める。
 - ⇒ 部活動の統廃合に関する検討を行うことはできなかった。今後の検討課題としたい。

(イ) 学校全体で、部活動を応援できる体制づくりを推進する。

- ・生徒会新聞に部活の活躍等を載せ、学校全体で情報を共有する。
- ・HPに部活動の成績や、活動内容を詳細に掲載する。
- ・部活動等の成績を、積極的に報道等に提供する。

⇒ 教育広報部と連携して、より多くの生徒の活躍をホームページに掲載し、一方でマスコミ等に積極的に伝えることができた。

○ 部活動の主な実績

女子バレーボール部：高総体の代替大会において県優勝。春高バレーの県予選大会で優勝し、全国大会に13回目（8年連続）の出場。初戦敗退。また、春高バレー全国大会の開会式において、部長が選手宣誓を行った。

男子バドミントン部：団体、個人、ダブルスの部で新人選抜東海大会出場

女子ソフトテニス部：ダブルスの部で新人選抜東海大会出場

空手道部：男女個人で新人選抜東海大会出場

バトントワリング部：バトントワリング県大会金賞、東海大会金賞、映像による全国大会で特別優秀賞

吹奏楽部：中部日本個人重奏コンテスト県大会金賞

将棋部：高校将棋選手権県大会女子団体戦3位、女子個人3位

(2) 「生徒の主体性の育成」

生徒一人ひとりが、問題や課題、将来の目標を見据え、自ら考え、工夫し、行動し、達成感を得ることのできる学校作りを進める。

- ・生徒に責任を持たせることで、リーダーを育成するという目標に向け、中央委員会を中心となり生徒の主体的な活動を集約する場を作る。

⇒ 各委員会の活動する機会が少ない（検討課題）。

- ・富士見祭や集会での生徒会本部や該当委員会の活動の一層の活性化を図る。

⇒ 富士見祭が中止されたため、生徒会の活躍の場が少なかった。

- ・研究発表や自主的な校外活動参加などを推奨し、将来の夢の実現に必要な資質・能力の伸長を促す。

⇒ 従来、図書委員会が発行してきた「ことのは」だけでなく、令和2年度は、生徒会本部が、生徒自身で様々なことを調査して発表する「生徒会マガジン」を発行することができた。

(3) 「学校の独自性の追求」

長い伝統を持った私立高校としての特色を更に伸ばし、生徒一人ひとりが愛校心をもてる学校づくりを目指す。

- ・建学の精神や校訓に関わる行事等の検討を進める。

⇒ 令和2年度は検討を進めることができなかった（来年度以降の課題）

- ・英語学習の更なる強化と国際理解教育を推進する。
- ・「地域への情報発信」の手段として、看板設置、ホームページ等を更に工夫する。
 - ⇒ ホームページについては、記事の更新を早めて、なるべく即時性を持たせるように工夫した。
- ・生徒が校外に出て地域への貢献活動、地域の人々と共にする活動を増やす。
 - ⇒ 令和元年度のように、コミュニティ研究会が、富士本町軽トラ市などの地域の行事に参加する予定であったが、コロナ禍のために中止され、参加できなかった。また、令和元年度に実施した、地域の子ども達のためのおにぎり食堂は、コロナのために外部向けには実施できなかった（校内では実施した）。令和2年度は、更に「障子張り替え隊」の実施、「コロナ感染症に対する注意ポスターや標語」の募集、「コミュニティ通信」の発行・地域家庭への配布等を行い、地域との連携が深まった。
 - ※ 今年度になって、すでに校舎周辺の河清掃、海岸清掃など積極的な活動が展開されている。

2 学習支援の強化（学習習慣の定着）

学習の中心は、授業である。教員一人ひとりが研修を積み実力の養成に努めるとともに、生徒の学習意欲を引き上げ、自発的な学習の姿勢を育てる。

- ・年度初め、夏休み明けなど、学校生活の開始の時期に、重点的に、生徒の生活習慣、学習習慣の定着（登校時間、服装、課題提出など）を図る。
 - ⇒ コース毎に課題提出を義務付けることで自発的な学習を促す指導を行った。全体として効果があったものと思われるが、学習意識の低い生徒に対する指導の工夫について、更なる改善が必要と感ずる。
- ・普通科の4コースについて、それぞれ以下の事柄の継続または改善を図る。

特進Ⅰ類・・・年度間の継続性のある指導体制の改善

- ⇒ 進路検討会や家庭学習の習慣化のための指導、定期的な学習診断と面談、英語週テストの実施など、組織的に継続指導する体制は年々整いつつある。今後も更に改善を重ねていきたい。

HAPの活動の工夫

- ⇒ 従来の授業形式を進めるための目的や学習時間確保のための補習から、受験に必要な教科の「講座制」という形にリニューアルできた。担当教員が提示した学習集団レベルや各教科の重点学習項目に沿って、生徒が能動的に講座を選択し、受講するというスタイルを確立することで、生徒の積極的な面を引き出すことができるようになった。

難関大学志望書に対する個別指導の充実

- ⇒ 各担当が生徒に対して十分なコミュニケーションをとりつつ、きめ細やかに指導できた。このスタイルが本校の特徴の一つとなっている。更に改善を図って行きたい。

特進Ⅱ類・・・全員参加のⅡ類ゼミの継続と改善の検討

⇒ 様々な原因で、毎週実施することが困難となっている。Ⅱ類ゼミの日は部活動が中止されているので、この日を通院にあてて、欠席する生徒が多々ある。担任などから、このゼミを継続していきたいという声も上がっているので、継続性と内容の改善が必要となっている。

全員が年間2回全国模試を受験

⇒ 生徒の実力診断や学習の振り返りには欠かせない。今後も継続していきたい。

特進Ⅲ類・・・Ⅰ類と合同の習熟度別学習集団編成

⇒ Ⅲ類の生徒間の学力格差が大変大きいので、Ⅰ類と合同で習熟度別授業をすることが効果的であると思われる。

2年次から早期に、国公立大学志望者対象の個別の大学二次試験対策を実施する。

⇒ 週一回、修正しながら行っている。早い段階で実施することで意識の高揚や実力養成の点で大切である。今後も続けたい。

進学コース・・・進学コースゼミや補習の実施と改善の推進。WSの内容の工夫

⇒ 月曜放課後の進学コースゼミについては実践力の育成に繋がっている。また、課題テストを系統立てて行っていることで各生徒の学力推移の認識と把握に役立った。しかし、11月に実施予定であったベネッセ総合模試については、力不足の感が否めず実施しなかった。

一方で、2月の大学入学共通テスト模試の受検者は46名おり、結果を見ると学力差の拡大に対する対応が課題であるように感ずる。

3 高校の生徒募集の安定化

令和3年度入学者は定員400名に対し322名（外進生304名、内進生18名）となり、令和2年度の入学者数311名を上回った。特進Ⅰ類の入学者数も令和2年度の40名に対し48名であった。来年度以降、特進Ⅰ類の生徒数の増加が課題となる。

・面倒見がよく進路に期待の持てる学校

⇒ 例年の通り、始業前や放課後等を利用した個別学習指導、面接指導に務めた。

・一人ひとりの生徒が楽しく学ぶことができる学校

⇒ 心の問題を抱えていて、教室での集団授業に参加できない生徒が依然として多数存在する。学校内の人間関係だけでなく、家庭における親との関係に悩む生徒も多く、家庭の環境改善の必要性を感ずる。担任一人ではなく、学年や学校全体で対応するため、情報の共有化、そのような生徒に対する意識的な声掛けや家庭との連絡を密にする中で改善を促したい。

・広報活動の充実

- 教育広報部の職員、管理職等による小・中学校訪問の更なる有効化
- 土曜入試相談のような、本校を直接みてもらう機会の設定
- 説明会などにおける、在校生による説明の機会を増やす
- 本校生徒の地域活動への積極的参加により、富士見校の存在感を高める。
- 学校のHPや各看板の内容を工夫

⇒ 緊急事態宣言の発令や、コロナ感染防止のために、例年に比べて、学校見学会や体験入学の機会が開催の時期が遅くなったり、機会が減少したことにより、効果が薄れてしまった感がある。半面、学校説明などにおいて、在校生による説明を企画したところ、在校生の表現力やプレゼン能力が、以前に比較して向上したことから、好評を博した面もある。

- ・現在、大学に接続している高校において入学者が増加する傾向にあることから、本校も、大学との連携を模索する。

⇒ コロナ禍の影響で、関東方面の大学訪問等が困難であったために、ほとんど進展しなかった。

4 中学校の運営・推進と生徒募集の安定化

令和2年度の中学校の入学者数は、定員60名に対し23名である。今回も定員を大幅に下回った。生徒の実態把握や外部からの情報の分析などにより、教育活動の工夫や生徒募集の改善に努める。また、各教育活動の関連を再確認し、それらの体系化を進める。

⇒ 令和3年度入学予定者は、10名と大幅に減少した。原因として、コロナ禍により、説明会などの広報行事が十分にできなかった点や公共交通機関による通学を避けようとする保護者の傾向が強かった点が考えられるが、更に、昨年度、入学選抜において、例年になく不合格者を出したことが原因であると思われる。しかし、入学者が20名を下回ることが常態化するという事態は、学校の経営に大きなダメージとなる以上、来年度は、中学校の存続をかけて、教育広報部を中心として、学校全体で広報に務めなければならないと考える。

- ・生徒の実態を踏まえた学習指導計画の改善と個性を伸ばす指導の工夫

⇒ 数学・英語の授業における1クラス2担任制の工夫や、放課後の時間を活用した個別指導用を実施した。

- ・8限に自主活動（部活動または自主学習等）の効果を高める工夫

⇒ 社会（調べ学習）・理科（実験）を中心としたスタディFを年間各10回程度実施した。また、放課後の時間を活用し、部活動、自主学習、塾、習い事等、生徒が自主的に活動内容を計画し行動できるようにした。

- ・教科の学習、F活動、学校行事等の相互の関連や育成したい資質能力との関連などの確認

⇒ コロナ禍の影響で多くの学校行事が中止となり、残念であった。その代わりに新しい試みとして、縦割り清掃、中学生委員会、ビブリオバトル等、生徒一人ひとりが主役となり、自ら考え、行動し、反省する活動を行った。

- ・ 広報活動、入試の回数・方法等、志願者数を増やす工夫
⇒ コロナ禍により、夏休みまでの広報イベントが全て中止になってしまった。来年度は、教育広報部と連携して、一人でも多くの児童・保護者に本校を知ってもらおう活動を工夫していきたい。
- ・ 令和2年度以降の入学生の教育課程や中高6年間の教育計画の検討
⇒ 各部署と連携して、継続して検討していきたい。

(2) 財 務 面

「健全財政の堅持」の実現に努め、令和2年度決算では基本金組入前収支差額は5,544万円の黒字であった。基本金組入額4,615万円を計上したことにより、当年度収支差額は929万円となった。昨年度繰越額18億7,085万円と合わせて翌年度繰越収支差額は18億円8,014万円となった。経常収入(10億992万円)の1.86倍(昨年1.69)の黒字であったが、当初2倍の財務目標は今年度も達成できなかった。

- 令和2年度当初の学園規模は下表のとおりです。(令和2年4月1日現在)

	富士見中学校	富士見高等学校	合 計
生 徒 数	61名	942名	1,003名
専 任 教 員 数	6名	40名	46名
常 勤 講 師 数	2名	29名	31名
非 常 勤 講 師 数	2名	19名	21名
専任事務職員数	1名	6名	7名
事務嘱託員数		4名	4名

- 人件費比率は、やや全国平均を上回っている。人件費依存率については学則定員充足率が72.7%(高校78.5%、中学33.9%)と低い数値のため全国平均を上回っている比率になると考えられる。

	令和2年度 富 士 学 園	令和元年度 全国高校法人平均
人 件 費 比 率 (対経常収入)	66.6%	65.0%
人 件 費 依 存 率 (対生徒納付金)	157.3%	123.4%
補正人件費依存率 (対生徒納付金+経常費補助金)	73.1%	73.2%

- 教育環境整備について

既存校舎改築に備え、積み増し(1,077千円(令和2年度卒業生寄贈分909千円))を進めており、施設設備拡充引当資産が4億8,898万円となった。